

<b>Title</b>	国際中世学会(英国・リーズ大学)に参加して：日本中世都市史研究の可能性
<b>Author</b>	仁木 宏
<b>Citation</b>	都市文化研究. 10 巻, p.141-142.
<b>Issue Date</b>	2008-03
<b>ISSN</b>	1348-3293
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
<b>Description</b>	学会レポート
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20171213-134

Placed on: Osaka City University

# 学会レポート

## 国際中世学会(英国・リーズ大学)に参加して —日本中世都市史研究の可能性—

仁木 宏

2007年7月、イギリスのリーズ大学で開催された国際中世学会に参加し、日本中世都市史に関する研究発表をおこなった。

毎年リーズ大学で開催される国際中世学会は、1,000人規模の参加者をあつめる大規模な学会である。今年は、「都市」が全体テーマであったため、とりわけ参加者が多かったという。イギリス人が8割を占めるが、アメリカ・フランス・ドイツ・イタリアをはじめ欧米諸国からの参加者も多い。ただ、日本人をのぞくとアジアからの参加は少ないようだ。

鶴島博和氏(熊本大学、イギリス中世史)がコーディネーターとなり、日本人のヨーロッパ中世史研究者が毎年、この国際中世学会に参加し、報告している。数年前、鶴島氏が同僚の春田直紀氏(熊本大学、大阪市立大学後期博士課程修了、日本中世史)に声をかけてから日本中世史のセッションがはじまった。

2006年は、高橋一樹氏(国立歴史民俗博物館、大阪市立大学後期博士課程修了、日本中世史)が本学会で報告したが、その際、2007年のテーマが「都市」である、ということで、私に声をかけてくださったのである。

私がさらに2人の研究仲間に応援を求め、日本中世都市史のセッションがたちあがった。セッションの内容は以下の通り。(7月9日)

Session122: The Feature of the Medieval Cities in Japan

山田邦和(同志社女子大学、考古学)

“KYOTO, The Capital of Medieval Japan”

仁木 宏

“The Structure of Medieval Cities and Religion in Japan”

山村亜希(愛知県立大学、歴史地理学)

“The Landscape of Political Cities in Medieval Japan”

日本中世都市の特徴を空間的複合性、宗教勢力の強さなどと指定した上で、古代の都城からの変遷、近世城下町への変化を論じるセッションとした。考古学、歴史学(文献史学)、歴史地理学をそれぞれ専攻する3人であるが、学際的な方法論を活用しながら、空間構造、景観などを基軸に、政治、経済、宗教などからませて都市を論じる手法をとった。日本中世都市史においては、現在、

あたりまえになっている研究方法である。

なお、この学会報告の準備報告会を、2007年4月21日、UCRC比較都市文化史研究会の例会として開催した。(本例会では、私たちのセッション以外の、ヨーロッパ都市史に関するセッションなどの準備報告も行われた。)

学会当日の報告は英語でおこなった。カラー版のオリジナルな日本中世都市図集を用意し、パワーポイントも活用した発表はおおむね好評であった。30名程度入るセミナー室がほぼ満室で、名簿によると、ドイツの都市史研究者、イギリス人のフランス都市史研究者などが出席していたようである。

質問内容から類推すると、日本中世都市が古代の都城の規定性を大きく引きずっている点、京都における寺院(宗派)の性格と配置、都市を描いた画像の理念(都市城壁がどうして都市図には描かれないか)、近世城下町の成立と自然地形の関連性などが興味をひいたようである。

高橋氏によると、これだけの参加者があつまり、質疑も盛り上がったことから、セッションとしては成功であった、とのことである。ヨーロッパの中世都市史研究者にとって、日本中世都市は興味をひく比較対象であるということである。

リーズ現地地で出会った日本人留学生によると、彼女の指導教員のドイツ中世都市史研究者は、中国とはちがう日本中世社会の西欧との類似性に興味をもっているという。そして彼女には、シュトラースブルクの都市祭礼と中世京都の祇園祭を比較した報告をこの学会で発表せよと指示したのである。

われわれの報告を聞いた彼女は、ドイツの都市史とちがって、日本中世都市史が考古学や歴史地理学と共同で研究を進めている点が驚きであったという。たしかに、ヨーロッパの都市史研究(歴史学)は、文献史料がたくさん残っているせいか、考古学と一緒に都市の空間構造や生活文化を解明してゆこうとする意欲に欠けるようである。

1950年代、日本中世都市史研究は、ドイツなど、ヨーロッパの中世都市にモデルを求め、西欧と同じような自治都市、自由都市が日本の16世紀にもあったかどうかの論争をくり広げた。1970年代以降、一部の歴史地理学者を除き、そうした比較研究は下火になる一方、日本中世都市の独自性が主張されるようになる。

都市の支配や自治組織、商人・ギルドの動向や経済流通などについては、日本と西欧を比較することは決して容易ではない。しかし、空間構造に注目し、そこから社会構造を読み取る方法については比較史の有効な方法になるのではないか。また、都市の全体的な姿を総合的に解明するための、歴史学(文献史学)、考古学、地理学、建築史(都市史)学などの共同作業がおこなわれる点は、

日本中世都市史が世界的にみても最先端であるらしい。

だとすれば、日本中世都市史に関する研究を英語など、ヨーロッパ言語で発信することで、ヨーロッパ諸国の、ヨーロッパ都市史研究者にアピールすることができる。国際中世学会でのわれわれの報告もその一端をになうものとして一定の成果を上げることができたといえるだろう。

今後のUCRCの活動に、今回の経験をいかしてゆきたい。